

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：心理学科

資格：講師

氏名：茂本 由紀

研究分野	研究内容のキーワード	
臨床心理学、認知行動療法	Acceptance & Commitment Therapy、抑うつ的反うつ、ルール支配行動、関係フレーム理論	
学位	最終学歴	
修士(心理学)、博士(心理学)	同志社大学大学院 心理学研究科 心理学専攻 博士課程後期 修了	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. オンラインでの双方向型授業の実践	2020年4月1日～2020年9月30日	京都文教大学の心理学実験の授業において、COVID-19の影響により心理学実験をオンラインで実施した。その際、オンライン上でも双方向のコミュニケーションが可能となるよう、Zoomを用いて、学生からの質問の受付を行った。また、授業開始時に学生同士のつながりを作るようにし、学生同士で質問しやすい環境を整備するといった工夫を実施した。
2. FD研修への参加	2020年4月	京都文教大学にて実施されたFD研修にすべて参加したことを表象され、Most Diligent Awardを受賞した。
3. 視聴覚教材および体験を重視した授業の実践	2018年4月1日～現在に至る	文字情報だけを呈示するのではなく、学生自身の体験にもとづいた学びが促進されるよう、過去の実験の映像や臨床心理に関わる映像を活用し、実際の体験を通しての学習が可能となるよう授業を実施している。
4. 授業評価アンケートの活用	2018年4月1日～現在に至る	授業アンケートでいただいた意見に沿って、授業改善を実施している。近年は、自主学習時間を学生の負担にならない範囲で、かつ学生の興味関心の幅を広げるために実施するための工夫を行っている。具体的には、学生が興味を持って自主学習できるように、資料の呈示や、簡単な課題の継続的な呈示を行うといった授業改善に取り組んでいる。
5. 学生の主体性を引き出す授業の実践	2018年4月1日～現在に至る	実験や演習の授業では、教員側から課題を呈示するのではなく、学生が抱く疑問に沿って、研究や実験の実施が可能となるように授業を進めている。学生の言語化できない疑問を言語化するためのディスカッションを授業内に多く取り入れるという工夫を実施している。
6. 双方向型授業の実施	2018年4月1日～現在に至る	前任校および本学において、双方向型の授業となるよう、授業を実施している。講義が中心となる大講義の授業であっても、呈示した問題に挙手をして参加する、周囲の人と相談し意見をのべる、Google Formで感想を提出するといった教員との相互作用を取ることが可能となるよう、工夫している。
2 作成した教科書、教材		
1. 言語と行動の心理学	2020年4月20日	学習・言語心理学の授業で使用するための教材として執筆された書籍の第2章第5節「関係反応を測定する－IRAPとFAST」を担当した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 公認心理師実習の実習指導	2022年10月1日～現在に至る	公認心理師カリキュラムを受講している学部生に対して、実習指導を行っている。学生の実習への不安や心配に寄り添いつつ、実習に関する書類作成や、積極的な実習参加が可能となるよう、助言や指導を実施している。
2. 大学院生の外部機関での実習への指導	2022年4月1日～現在に至る	大学院生の外部機関での実習の実習指導を実施している。実習での学びを言語化するだけでなく、学生自身で問題を乗り越えることができるよう、必要な知識は助言しつつ、教員とのディスカッションを通して、学生が主体的に解決策を導き出せるような指導を実施している。
4 その他		

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
1. Nikkei STEAMでの心理学体験ブースの担当	2024年7月30日	Nikkei STEAMでの心理学体験ブースにて、茂本が開発した漢字迷路課題という実験課題を提供した。来場者にこの課題を実施してもらうことで、人間が頭の中で作り上げるルールの強さを体感してもらい、心理学とはどのようなものかを体験してもらった。
2. オープンキャンパス模擬授業担当	2024年3月23日	マインドフルに食べるという体験を通して、心理学とはどのようなものであるかを体験してもらう授業を実施した。
3. オープンキャンパス模擬授業担当	2022年8月11日	心理学とはどのようなものかを、臨床心理学の思考のコントロールという視点から体験を交えた授業を実施した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 公認心理師	2019年3月11日	登録番号：24021
2. 臨床心理士	2014年4月1日	登録番号：28283
2 特許等		

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 児童養護施設「京都大和の家」相談担当およびスーパーバイザー	2022年10月1日～現在に至る	児童養護施設にて、入所児童および職員へのカウンセリングと施設職員および心理師へのスーパービジョンを実施している。特に性的虐待等の女性カウンセラーが必要とされやすい事例を担当している。
2. JOHNNAN株式会社 健康相談室 相談員	2022年10月1日～現在に至る	会社に設置されている相談室にて、カウンセリングおよびコンサルテーションを実施している。メンタルダウン者へのカウンセリング、職場復帰支援、ストレスチェックへの助言等を実施している。
3. 佛教大学大学院 院生へのスーパービジョン	2019年10月1日～2022年3月31日	佛教大学大学院の院生へのスーパービジョンを担当した。院生の担当しているケースについて、院生からの報告をもとに、次にどのような支援が可能となるかをディスカッションし、院生自身で次回の方針が立てられるよう、指導を実施した。
4. 梅花女子大学大学院 心理教育総合相談センター 相談員	2019年4月1日～2020年3月31日	梅花女子大学大学院の相談センターにて地域の方々へのカウンセリングの担当および、大学院生と一緒に親子並行面接を実施した。担当ケースは3ケースであり、気分障害や親子関係のケースを担当した。
5. 田辺メンタルクリニックにて非常勤心理師として勤務	2017年4月1日～2022年3月31日	クリニックにて、中学生から成人に対するカウンセリングを約80ケース担当した。担当疾患は、気分障害、強迫性障害、不安障害、人格障害、発達障害等、多岐にわたる疾患を担当した。
6. 滋賀県湖南市の教育委員会にてスクールソーシャルワーカー(嘱託職員)として勤務	2014年4月1日～2015年3月31日	滋賀県湖南市の小学校にて、スクールソーシャルワーカーとして勤務した。具体的には、教職員や管理職の方々へのスーパービジョンおよび、保護者へのカウンセリングを実施した。

4 その他		
1. 武庫川女子大学教育総合研究所 研究員	2024年4月1日～現在に至る	研究所の研究員として、臨床実践研究を実施している。具体的には、親子相互交流療法の臨床実践研究および、修了生実態調査研究に携わっている。
2. 教学局 広報入試委員	2024年4月1日～現在に至る	広報入試委員として、委員会への出席および、オープンキャンパスの運営、高校出張の采配業務、総合型入試への対応を実施している。
3. 心理実習・心理実践実習ワーキンググループ	2023年12月1日～現在に至る	学部生の心理実習および、大学院生の心理実践実習についての授業計画や、実習先検討を実施している。心理実習と心理実践実習の授業計画や、実習先の割り振りについて議論を行っている。
4. 総合型選抜・広報ワーキンググループ	2023年10月1日～現在に至る	心理学科で初めての実施となる総合型選抜入試の体制の構築および、オープンキャンパスの企画立案のためのワーキンググループの一員として活動している。総合型選抜の具体的な実施方法の確立や、オープンキャンパス

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
5. 甲南女子高等学校 模擬授業（出張講義） 講師	2023年9月27日	ンパスの企画立案と運営を実施している。高校1年生および2年生を対象に心理学とはどのようなものを体験してもらおう授業を実施した。具体的には、スマホの使用をやめるということをテーマに臨床心理学を体験してもらおう授業を行った。
6. 教学局 学生委員	2023年4月1日～2024年3月31日	学生委員として委員会への出席および、幹事懇談会の実施支援、文化祭および体育祭での補助業務等を実施した。
7. 教学局 広報入試委員	2022年10月1日～2023年3月31日	広報入試委員として、委員会への出席および、入試業務への対応、入試合格者の原案作成の補助を実施した。
8. 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所 研究員	2022年4月1日～2024年3月31日	研究所の研究員として、運営会議への参加および研究所の運営を実施した。また、親子相互交流療法の臨床実践研究に携わった。
9. 心理学実験ワーキンググループ	2021年4月1日～2022年3月31日	京都文教大学において、心理学の基礎知識を1回生の頃から身につけてもらうためには、心理学実験をどのように導入するのが良いかという初年次教育についてのワーキングに参加した。心理学実験の初歩を1回生から取り入れることについての計画を立案した。
10. ともいき基盤教育委員	2021年4月1日～2022年3月31日	京都文教大学にて、委員会へ出席し、今後の基盤教育と臨床心理学部との連携について検討を行った。
11. 心理学検定委員	2019年4月1日～2022年3月31日	京都文教大学にて、公認心理師カリキュラム受講者選抜の一環であった心理学検定の受検対策および、検定の実施を担当した。受検対策では、2週間に1度模擬問題を作成し、対象学生に呈示した。また、心理学検定の集団受検の運営を行った。
12. 卒論サポーター委員	2018年4月1日～2022年3月31日	卒論サポーター委員として、学部生の卒論補助のアルバイトをしてくれる大学院生を採配し、卒論サポーターの運営を実施した。また、アルバイトをしてくれる大学院生へ統計や研究法の勉強会を実施し、卒論のサポートができるよう指導を行った。
13. 公認心理師資格運営委員会	2018年4月1日～2022年3月31日	公認心理師資格運営委員として、公認心理師資格の取得を希望する学生への説明会の実施や、学生への面談を担当した。
14. オープンキャンパス委員	2018年4月1日～2022年3月31日	京都文教大学にて、オープンキャンパスの企画と運営を実施した。オープンキャンパスの内容決定や、当日の人員採配等をオープンキャンパス委員の先生方と協力して実施した。
15. 中高教職免許委員	2018年4月1日～2019年3月31日	中高教職免許委員として、会議に出席し、教職免許の取得を希望する学生の状況を把握し、学科の会議にて報告するという業務を実施した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. これならわかるく スッキリ図解＞精神保健福祉制度のきほん	共	2021年7月	翔泳社	編著者：二本柳覚，石井佳葉，茂本由紀 担当章：第4章「精神疾患の治療法」 pp.82-100 第6章「働く人のための精神保健福祉」 pp.128-150 全頁数175頁 内容：担当章では、精神保健について学びたい学部生の教科書となるよう、精神疾患の治療法の概観をまとめ、産業界での精神保健福祉の基本知識をまとめた。
2. ACT Matrixからの機能的アサーションーダイアグラムを用いて	単	2021年3月	臨床心理学（金剛出版）	著者：茂本由紀 21巻2号pp.177-184 内容：本著書では、機能的アサーションを実施する上で、ACT Matrixをどのように活用するかを架空事例を用いて紹介した。
3. 言語と行動の心理学ー行動分析学を学ぶー	共	2020年4月	金剛出版	編著者：谷晋二，共著者：大月友，北村琴美，茂本由紀，他2名 担当章：第2章5節「関係反応を測定するーIRAPとFAST」 pp.86-112 全頁数226頁

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
4. 55歳からのアクセプト・セラピー (ACT)超高齢化社会のための認知行動療法の新展開	共	2017年3月	非特定営利活動法人ratik	内容：担当箇所では、関係フレーム反応を測定する上で使用される行動指標であるIRAPとFASTの概観および、実施方法、データ処理方法をまとめ、記載した。 編著者：武藤崇，共著者：茂本由紀，他6名 担当章：第1章「うつ」 pp. 53-81 全頁数302頁 内容：担当章では、高齢者のうつについてどのような症状がみられやすいのか、どのような対応が必要であるかをまとめ、記載した。
2 学位論文				
1. 抑うつの反すうに対する脱フュージョン手続きの効果—効果測定法の開発とその妥当性の検討— (博士論文)	単	2018年3月	同志社大学	本論文は、抑うつの発症、維持、悪化に関わるとされる抑うつの反すうおよび、それに関連する関係フレーム反応や行動の柔軟性を測定する行動指標の開発および、抑うつの反すうを軽減する有効な介入方法を検討した一連の研究の成果をまとめた論文である。これらの一連の研究により、抑うつの反すうを測定する行動指標を社会に呈示するとともに、抑うつの反すうへの有効な介入方法も提案した。
2. 脱フュージョンの作用メカニズムに関する検討 —脱フュージョン・エクササイズの順序効果— (修士論文)	単	2013年3月	同志社大学	本論文では、脱フュージョンエクササイズを機能ごとに分類し、機能の違いに沿って、エクササイズの実施順序を変更することで、脱フュージョンの促進に違いがみられるかを検討した。研究の結果、エクササイズの機能に沿った実施順序の変更により、促進される脱フュージョンの側面が一部異なることが示された。
3 学術論文				
1. The Effect of a Defusion Exercise Including a Hierarchical Procedure on Depressive Rumination (査読付き)	共	2024年	Japanese Psychological Research	共著者：Shigemoto, Y., Stewart, I., & Muto T. 内容：本論文では、脱フュージョンが抑うつの反すうへの介入方法として有効であるかを検討した。研究の結果、脱フュージョンだけでは抑うつの反すうへの介入には不十分であることが示唆された。同時に、今後、対象者ごとに脱フュージョンの対象とする刺激を変更する必要があることが示唆された。
2. 漢字迷路課題の改良と妥当性の検討—関係フレーム反応と抑うつの反すうの測定— (査読付き)	共	2018年1月	認知行動療法研究	共著者：茂本由紀，武藤崇 44巻1号 pp3-14. 内容：本論文では、抑うつの反すうを構築する関係フレーム反応を測定できるよう、漢字迷路課題を改良し、その妥当性を検討した。その結果、今回開発した漢字迷路課題では妥当性は不十分であり、今後、関係フレーム反応を測定するセクションを設定する必要性が示唆された。
3. 漢字迷路課題の妥当性の検討—非柔軟性と関係フレームづけの測定— (査読付き)	共	2017年2月	感情心理学研究	共著者：茂本由紀，武藤崇 24巻2号 pp61-70. 内容：本論文では、行動の柔軟性および、関係フレーム反応の両方の測定が可能となる漢字迷路課題の開発と、その妥当性の検討した。その結果、漢字迷路課題は行動の柔軟性の測定法としては妥当であるが、関係フレーム反応の測定には漢字迷路課題の改良が必要であることが示唆された。
4. 脱フュージョン・エクササイズ的作用メカニズムの検討—3つのエクササイズの順序効果について (査読付き)—	共	2013年12月	心理臨床科学	共著者：茂本由紀，武藤崇 3巻1号 pp13-26. 内容：本論文では、茂本・武藤(2012)の内容を参考に、脱フュージョン・エクササイズの機能ごとに実施の順序を変更することで、効果に差が出るかを検討した。その結果、エクササイズの実施順序の違いにより、促進される脱フュージョンの側面が一部異なることが示された。
5. 脱フュージョン・エクササイズに対するアナログ研究の現状とその課題 (査読付き)	共	2012年12月	心理臨床科学	共著者：茂本由紀，武藤崇 2巻1号 pp81-91. 内容：本論文では、脱フュージョンを促すために使用されるさまざまなエクササイズは機能ごとに分類が可能であるかを検討した。この研究では、脱フュージョンのエクササイズを機能ごとに分類し、機能ごとにエクササイズが促す脱フュージョンの側面が異なってい

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 多職種のためのアクセプトランス&コミットメント・セラピー入門 講師	共	2021年7月	第18回日本うつ病学会総会；第21回日本認知療法・認知行動療法学会	共同講師：酒井美枝，茂本由紀，嶋大樹 内容：本ワークショップでは、心理師だけでなく、医師や看護師といった心理師と協同する対人援助職の方を対象にACTを紹介し、多職種協同においてACTをどのように活用するかを事例を通して紹介した。
2. 学会発表				
1. 抑うつとの関係フレーム反応を捉える漢字迷路課題の開発—漢字迷路課題の妥当性の検討—（ポスター発表）（発表確定）	単	2024年9月	日本心理学会第88回大会	発表者：茂本由紀 内容：本発表では、関係フレーム反応を測定するセクションを漢字迷路課題に設定し、そのセクションでの測定が関係フレーム反応の測定指標として妥当であるかを検討した結果を発表した。研究の結果、関係フレーム反応の妥当性は示されず、ポジティブな言語刺激への反応時間を計測できるよう改良する必要性が示唆された。
2. 親子相互交流療法（PCIT）介入前後の親子の行動の変化—親子の行動の生起頻度の比較から—（ポスター発表）	共	2024年8月	日本臨床心理学会第43回大会	共同発表者：細川亜紀，新澤伸子，茂本由紀 内容：本発表では、PCITの介入前後によって、親子の行動の種類ごとに生起頻度を分析し、その結果を発表した。研究の結果、PCITの介入前後において、親の行動の変化だけでなく、子どもの行動の種類が生起頻度にも違いが認められた。
3. 日本語版児童・青年期の愛着スタイル分類尺度の開発（ポスター発表）	共	2024年3月	発達心理学会第35回大会	発表者：茂本由紀，津田菜摘，北村琴美，井上和哉，谷晋二 内容：本発表では、児童と青年期の愛着スタイルを分類する尺度を日本語版に翻訳し、その妥当性と信頼性を検討した結果を発表した。研究の結果、英語版とは異なる項目が採用されたものの、同じ3因子での解釈が妥当であることが示された。
4. 親子相互交流療法（PCIT）介入前後の親子相互作用の変化②（ポスター発表）	共	2024年3月	発達心理学会第35回大会	発表者：竹島克典，新澤伸子，茂本由紀，細川亜紀 内容：本発表では、PCITの介入により、親子の相互作用の質がどのように変化したかを状態空間グリッド分析にて分析した結果を発表した。研究の結果、介入前と後で別の相互作用の動きが観察された。
5. 親子相互交流療法（PCIT）介入前後の親子相互作用の変化①（ポスター発表）	共	2024年3月	発達心理学会第35回大会	発表者：新澤伸子，竹島克典，茂本由紀，細川亜紀 内容：本発表では、PCITの介入により、親と子の相互の発言や行動がどのように変化したのかを分析した結果を発表した。研究の結果、介入により、親からの声かけによって、子どもの適切な行動が増加していることが示された。
6. 専攻分野でのアクティブ・ラーニングと社会人基礎力の関連—臨床心理学専攻の大学を対象とした検討—（ポスター発表）		2023年9月	日本心理学会第87回大会	発表者：茂本由紀，浦野由平，鈴木孝 内容：本発表では、心理学実験の授業でのアクティブラーニングを通して、学部生はどのような社会人基礎力を身につけているかを検討した結果を発表した。研究の結果、アクティブラーニングを通して、働きかける力や、考える力、伝える力が培われていることが示唆された。
7. ルール支配行動の基礎と応用を発展させるためにできることは？（口頭発表）	共	2023年9月	日本行動分析学会第41回大会	発表者：井上和哉，茂本由紀，中村敏，紺田真穂，大河内浩人，谷晋二 内容：本シンポジウムでは司会を担当した。ルール支配行動についての基礎研究を先生方にご発表いただき、基礎と臨床をつなぐ上で今後必要になるのはどのようなことをかを議論した。
8. ルール支配行動とPBT—基礎と臨床をつなぐ—（口頭発表）	共	2022年10月	日本認知・行動療法学会第48回大会	発表者：津田菜摘，古野公紀，茂本由紀，菅原大地，谷晋二 内容：本シンポジウムでは話題提供を行った。話題提供では、ルール支配行動とはどのようなものかを概観した後、ルール支配行動によってもたらされる悪影響について紹介した。他の先生方からもルール支配行動について紹介いただき、ルール支配行動への介入にどのような可能性があるかを議論した。
9. IRAP can capture Japan's AARRs in flight: Interpreting from DAARRE model.（口頭発表）	共	2021年6月	Association for Contextual Behavioral Science Virtual World Conference	発表者：Tani, S., Zhang, P., Inoue, K., Shigemoto, Y., & Miseli, G. 内容：本シンポジウムでは話題提供を行った。漢字迷路課題での関係フレーム反応の結果をDAARREモデルの視点からTani, S., Zhang, P., Inoue, K., Shigemoto, Y., & Miseli, G.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
発表)				
10. 大学の心理学教育に活かす心理学検定の役割 (口頭発表)	共	2019年9月	日本心理学会第81回大会	内容：本シンポジウムでは話題提供を行った。漢字迷路課題での関係フレーム反応の結果をDAARREモデルの視点から検討し、抑うつ傾向の高い人は、ポジティブ刺激に対しての強い関係性を有している可能性を紹介した。また他の先生方の研究発表を通して、関係フレーム反応の分析には、DAARREモデルの適用が必要になることを議論した。 発表者：小林剛史，藤田主一，大坊郁夫，小野瀬雅人，堀毛一也，沢宮容子，太田信夫，秋山学，茂本由紀，横田正夫
11. ASD児へのACT Matrixの日本での適用 (口頭発表)	共	2019年9月	日本認知・行動療法学会第45回大会	内容：本シンポジウムでは話題提供を行った。心理学検定を大学でどのように活用しているかについて京都文教大学の事例を紹介した。他の先生方からも心理学検定の活用方法についてご意見いただき、心理学検定の今後の活用の可能性について議論した。 発表者：谷晋二，菅野晃子，茂本由紀，坂野朝子，三田村仰
12. Can we capture AARRing in non-English speaking participants (Japanese and Chinese)? — Modified IRAP, FAST and Developing new measure: the Kanji Maze Technique (KMT)— (口頭発表)	共	2019年6月	Association for Contextual Behavioral Science World Conference 17	発表者：Tani, S., Stewart, I., Shigemoto, Y. Tsuda, N., & Zhang, P. 内容：本シンポジウムでは、話題提供を行った。関係フレーム反応を測定する行動指標として、他の研究者がIRAPやFASTを紹介し、研究者は漢字迷路課題を紹介した。これらの行動指標の概観を通して、今後の行動指標のあり方について議論を行った。
13. セラピープロセスを行動の視点から捉える (口頭発表)	共	2019年3月	日本行動科学学会 ウィンターカンファレンス	発表者：茂本由紀，嶋大樹，村井佳比子 内容：本シンポジウムでは、話題提供を行った。話題提供では、抑うつの反すうを関係フレーム理論の視点から概観し、関係フレーム反応の測定法として漢字迷路課題が有用となる可能性について示唆した。
14. 抑うつの反すうと行動の柔軟性に対する脱フュージョンの効果 (ポスター発表)	共	2017年9月	日本認知・行動療法学会	発表者：茂本由紀，武藤崇 内容：本発表では、抑うつの反すうに効果的だと考えられる脱フュージョンの介入が実際に効果があるかについて検討した結果を発表した。研究の結果、クライアントの状況に応じた脱フュージョンの介入の必要性が示唆された。
15. 関係フレーム理論 (RFT) は認知・行動療法に何を提供できるか? (口頭発表)	共	2016年10月	日本認知・行動療法学会	発表者：大月友，佐藤友哉，茂本由紀，上村碧，山本淳一，伊藤義徳 本シンポジウムでは、話題提供を行った。話題提供として、漢字迷路課題で関係フレーム反応を測定できる可能性があること、抑うつの反すうは関係フレーム反応により構築されているので、脱フュージョンが有効となることを発表した。
16. Investigation of validity on the Kanji Maze Task as a defusion measure from verbal relation and relational Responding. (ポスター発表)	共	2016年6月	Association for Contextual Behavioral Science, World conference 14	発表者：Shigemoto, Y., & Muto T. 内容：本発表では、関係フレーム反応と抑うつの反すうの測定が可能となるよう漢字迷路課題を改良し、その妥当性を検討した内容を発表した。研究の結果、関係フレーム反応の測定指標としての妥当性は示されなかったが、抑うつの反すうの測定指標としての妥当性が示された。
17. 漢字迷路課題の妥当性の検討— 言語刺激を使用した非柔軟性の測定— (ポスター発表)	共	2015年10月	日本認知・行動療法学会	発表者：茂本由紀，武藤崇 内容：本発表では、行動の柔軟性を測定する行動指標を開発し、その妥当性を検討した内容を発表した。研究の結果、開発した漢字迷路課題は行動の柔軟性を測定する行動指標として妥当であることが示された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
18. Developing a new behavioral task for measuring defusion in depressed people: comparing performance on Kanji maze task and IRAP. (ポスター発表)	共	2015年7月	Association for Contextual Behavioral Science, World conference 13	発表者：Shigemoto, Y., & Muto T. 内容：本発表では、関係フレーム反応の測定が可能となるよう、漢字迷路課題を改良し、その予備実験の内容を発表した。予備実験の結果、漢字迷路課題の計算方法に改良が必要であることが示唆された。
19. Developing a new behavioral rigidity task for depression: Application of alphabet-maze task. (ポスター発表)	共	2014年6月	Association for Contextual Behavioral Science, World conference XII	発表者：Shigemoto, Y., & Muto T. 内容：本発表では、行動の柔軟性を測定する指標として漢字迷路課題を開発し、その妥当性を検討した結果を発表した。研究の結果、漢字迷路課題は行動の柔軟性を測定する指標として有用であることが示された。
20. Examination for mechanism of defusion exercise: Effects of sequence variation on conducting three defusion exercises. (ポスター発表)	共	2013年7月	Association for Contextual Behavioral Science, World conference XI	発表者：Shigemoto, Y., & Muto T. 内容：本発表では、脱フュージョン・エクササイズを機能ごとに実施することで、有効な効果を発揮することが可能であるかを検討した結果を発表した。研究の結果、エクササイズの機能だけでなく、対象者の状況も考慮したエクササイズの実施が必要になることが示唆された。
3. 総説				
1. 抑うつ的反すうと行動の非柔軟性を行動指標から捉える (査読付き)	単	2020年2月	行動科学	著者：茂本由紀 58巻2号 pp.77-86. 内容：本論文では、行動の柔軟性および抑うつ的反すうを測定するために開発した行動指標のこれまでの成果をまとめて記載し、今後の行動指標開発に必要となるものについての考察を行った。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 子どものためのACT実践ガイド	共	2024年6月	金剛出版	監訳者：谷晋二 共同訳：谷晋二, 北村琴美, 茂本由紀 担当章：第3章「「そのままにする」と「手放す」」pp.67-105, 第4章「「大切なことを選ぶ」と「大切なことをする」」pp.107-143 全頁数257頁
2. 認知行動療法のHEARTは何か?	単	2023年10月	2023年度京都文教大学心理臨床センター公開研修会	講師：茂本由紀 内容：京都文教大学の院生および修士生を対象に、認知行動療法を学びたい人へ機能分析についての概説および、体験的ワークショップを実施した。クライアントの発言や行動の機能をどのように見ていけばよいかについて、自身が担当した事例を通して紹介した。
3. ACTマトリックスのエッセシャルガイドーアクセプタンス&コミットメント・セラピーを使う	共	2021年12月	遠見書房	監訳者：谷晋二 共同訳：谷晋二, 坂野朝子, 茂本由紀, 石川僚介, 北村琴美 担当章：第2章「ステップ2：離れる行動の効果の理解」pp.67-96, 第3章「ステップ3：フックとコントロール努力の問題」pp.97-122 全頁数350頁
4. 生きづらさを怠けよう脱シュージョンのすすめ 生きづらさでつながり「生きづらい」と言える集い 講師	共	2020年10月	社会福祉法人 京都いのちの電話事務局 キャンパスプラザ京都	共同講師：住岡恭子, 茂本由紀 内容：本講演では、生きづらさを感じる一般の方々を対象に、ACTを基盤とした簡単に実践できる介入技法を紹介した。具体的には、ネガティブな思考から受ける影響力を弱める介入を体験してもらい、家庭でも実施できる方法を紹介した。
5. 教えて！ラス・ハリス先生 ACTがわかる	共	2020年5月	星和書店	監修者：武藤崇 監訳者：大屋藍子, 茂本由紀, 嶋大樹

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
Q&A セラピストのためのつまずきポイントガイド				共同訳者：大屋藍子，茂本由紀，他5名 担当章：第9章「ダーティな脱フュージョン」 pp.174-214，第16章「悪戦苦闘のアクセプタンス」 pp.291-298 全頁数360頁
6. CBTプログラムによる事例検討ワークショップ 講師	共	2019年9月	CBTプログラム研修会	共同講師：実光由里子，茂本由紀 内容：本ワークショップでは、認知行動療法を学びたいという臨床家を対象に、認知行動療法の歴史を概観し、第3世代の認知行動療法であるACTを紹介した。
7. マインドフルにいきいき働くためのトレーニングマニュアル 職場のためのACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー)	共	2015年6月	星和書店	監訳者：武藤崇，土屋雅雄，三田村仰 共同訳者：今村幸太郎，馬ノ段梨乃，梅澤友香里，榎本正己，菊田和代，小林由佳，酒井美枝，坂野朝子，茂本由紀，他5名 担当章：第8章「ACTトレーナーの態度とスキル」 pp.208-224 全頁数308頁
6. 研究費の取得状況				
1. 妊娠から周産期うつ予防に対する認知行動療法プログラムの開発	共	2024年4月～現在に至る	日本学術振興会 基礎研究C	研究代表者：田中美帆 研究分担者：茂本由紀 内容：本研究費では、妊娠期の妊婦へのうつ予防のため、妊娠期のうつの要因を質問紙調査で調査し、妊婦へのACTを基盤とした介入の実施を行う予定としている。現在、調査の実施をおこなっており、今後は調査結果をまとめ、介入の準備を行う予定としている。
2. 言語的ルールが人の行動に及ぼす発達の、実験的研究	共	2021年4月～2024年3月	日本学術振興会 基盤C	研究代表者：谷晋二 研究分担者：茂本由紀，井上和哉 内容：本研究費では、ルール支配行動による心理的問題を測定する質問紙の開発および、その結果の国際比較と、ルール支配行動に関する基礎研究の検討を行った。
3. 抑うつ反すうに対する脱フュージョン手続きの効果の検討とその効果測定法の開発	単	2019年4月～現在に至る	日本学術振興会 若手研究	研究代表者：茂本由紀 内容：本研究費では、抑うつ反すうの構築に関与している関係フレーム反応を捉える行動指標である漢字迷路課題を開発を行っている。一連の研究により、抑うつ傾向の高い人はポジティブ刺激間の強い関係性を有している可能性が示された。また現在、ポジティブ刺激間の関係性の強さを漢字迷路課題で測定することは可能かを検討している。
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2024年4月1日～現在に至る	The Japanese Association for Contextual Behavioral Science 理事			
2. 2023年4月1日～現在に至る	一般社団法人 日本行動分析学会			
3. 2018年8月1日～2022年3月31日	京都府臨床心理士会 会員			
4. 2018年4月1日～現在に至る	公益社団法人 日本心理学会 会員			
5. 2018年4月1日～現在に至る	一般社団法人 日本心理臨床学会 会員			
6. 2016年4月1日～現在に至る	The Japanese Association for Contextual Behavioral Science 会員			
7. 2015年4月1日～現在に至る	日本感情心理学会 会員			
8. 2014年4月1日～2018年7月31日	奈良県臨床心理士会 会員			
9. 2012年4月1日～現在に至る	Association for Contextual Behavioral Science 会員			
10. 2012年4月1日～現在に至る	一般社団法人 日本認知・行動療法学会 会員			